未明

エース

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
未明

【Ｎコード】
Ｎ０７０７Ｊ

【作者名】
エース

【あらすじ】
ある青年が地球を離れ２０億光年先の星ザータナへ・・・・
両親、兄弟の事故死とはっきりとしない組織の詳細。
彼はこれからどんな人生を歩んで行くのか・・・？
駄作ですｗ　文章力無しなのでｗ
つまんなくなったら即読むのを中止してください＞＜
ものすごく展開遅いです！

それでっも良ければ読んでみてください。

１（前書き）

展開遅いし文章力無いのでゴタゴタですが・・・。
よかったら読んでみてくださいｗ

つまんなくなったらすぐＧＩＶＥ　ＵＰすることをお勧めします！

1

1

ここは…どこだ？
周りは真っ暗…夢の中か？　俺はいまどこにいる？　家か？・・・・
頭の中には様々な疑問が浮かび上がる。
あれからどのくらいの時間が経ったのだろうか・・・

「お目覚めのようだな。真くん。」
低く落ち着いた声が聞こえた。　目を開けるとそこには黒いスーツに黒縁メガネをかけた背の高い男
あまりの驚きに反応できずにいると、
「まぁ、無理もないな・・・」
男は言った。

自己紹介が遅れたな。　俺の名は結城　真（ゆうきまこと）。
今はよくわからない場所にいる。　不審な男と一緒に。
またあの男が口を開いた。

「私の名前は笹峰　沙希戸（ささみねさきと）。今日から君とともに旅をすることになっている。よろしく頼むよ。」
どうやら俺に向かっての自己紹介のようだ。
「あの、ここはどこですか？」

さっきから気になっていた質問を投げかける。まぁ、当然と言えば当然なんだが・・・。

「ここか？　ここは船の中。　正確に言えば宇宙捜索船の中だ。」
宇宙捜索船？　ここが宇宙だって言うのか？　　頭の中にはいくつもの？が浮かぶ。
「いま宇宙にいるって言うんですか？俺ら・・・」
「ああ、今さっき地球を出発したところだ。　言っておくが、これから私たちは宇宙を旅する。この船でな。」
俺が宇宙を旅する・・・？この笹峰って男と一緒にか？本当に地球から宇宙へ？

「詳しいことは夕食のときにでも話すことにしよう。１９時になったら迎えに来る。　それまでゆっくりしておけ。」
それだけ言うと笹峰とやらは部屋を後にした。

笹峰がいなくなり改めて部屋を見回してみる。　壁、天井はすべて白。俺が今いるベットはセミダブルくらいの大きさだろうか・・・壁には丸い掛け時計があり、１７時３０分を指している。この時計でいけば晩飯まで一時間半あるということになる。
俺はベッドから降り部屋を見て回った。クローゼットや机、椅子がありとても船の中とは思えないほどの広さだ。
ここは本当に宇宙船の中なのだろうか。俺は何故こんなところにいる？
頭の中はやはり？ばかりで混乱する。

部屋の中をぐるぐると回っているとドアがあった。　その向こうには洗面所、風呂、トイレがあった。
「こんなものまで備わっているのか？」
とりあえずしばらくはここにいることになるのだろう。今夜話してくれると言っていたし。
アイツのことを信用しているわけではない・・・だが今のままでは

情報が少なすぎる。ただそれだけのことだ。

「夕飯の用意ができた。ついていたまえ。」
こんなことを考えていたら声が聞こえた。もうそんな時間なのか・・・
・
俺はおとなしくついていく。　この部屋から出るのは初めてだ。部屋の外はとても長い廊下だった。
想像していたものとは全く違い、とても明るく豪華だった。

「ここだ。　中に入りたまえ。」
言われた通り実行するとさっきの部屋より倍以上もの広さの部屋だった。　その部屋は壁が茶色っぽく、アンティークっぽいシャンデリアやランプなどがあり、とても豪華な食事が並んでいた。
あまりの驚きにたたずんでしまっていた俺に笹峰の声が聞こえる。
「好きな場所に座ってくれ。」
俺は一番近くにあった椅子に座った。　すると笹峰が部屋を出てどこかへ行ってしまった。
しばらくして戻ってきたのは笹峰ともう一人、見知らぬ男・・・。
その男は俺の目の前の席に座り、笹峰はその隣に。

しばしの沈黙。　　それを破ったのは見知らぬ男だった。
「君には話しておかないとね。　僕は青海　シュウ（あおみ　しゅう）。君をここへ連れてきた張本人さ。」
見た目からしておとなし目の男だ。　これにどう対応していいか迷っていた俺に聞きなれた声が聞こえた。
「真くん、この方が君を此処へ連れてくるよう命じた方だ。」
そう助言され、一応自己紹介をした。
「結城真です。」

「目的地へは一週間ほどで着く、だよね？笹峰。」
「はい。」
「それまでゆっくり過ごしていてくれてかまわないよ。この船の中だったら自由だから。」
青海は言う。気持ち悪いほど優しい、落ち着く声で。
それだけい言うと去ってしまった。　ここに残るのは俺と笹峰の二人。

2

俺が此処に来て二日目。
起きた時は7時になっていた。勝手に使っていいのかはっきりしてはいないが洗面所で顔を洗い、置いてあったハブラシで歯をみがく。着替えがないと思っていたらベッドの上に服が置いてあった。サイズもぴったりだ。　どうやって調べたのかはこれもまた分からない。だが何の仕掛けもないと分かった俺は素直に着替えることにした。

もうすっかり馴染んでしまったのか、言うことを聞くしかないと諦めたのか・・
自分でも詳細は定かではない。がそんなことはどうでもよくなってしまっている自分がいる。
そんな呑気なことを考えているとドアのノックする音が聞こえた。
　俺が返事する前に開いたが相手はある程度特定できているのであまり気にはしない。

「おはよう。真くん。朝食の準備ができている、ベッドに着替えが置いてあっただろう？　もう既に着替えているようだが。　昨日の部屋で待っている。」
案の定訪ねてきたのは笹峰だった。
言いたいことだけいうと出て行ってしまった。俺は後を追うように昨日の部屋へと向かった。

部屋に入ると洋風の朝食が準備されていた。昨日と同じ席に着き食事をとった。
食べ終える頃に笹峰が俺の正面の椅子に腰かける。古そうな本を持って。
「あの、それ何の本なんですか？」

なんとなくだか本の存在が気になり聞いてみた。
「この本は今向かっている目的地、ザータナという国の歴史について綴られている。君を此処へ連れてきたのと深い関係があってな。昨日話さなかったことを今から話そうと思う。」
ザータナ？そんな国名初耳だ。それもそうか、地球には存在していないんだからな・・・。
そんな地球と無関係な国が何故俺なんかと関係があるのだろうか？とても疑問に思っていたら笹峰が口を開いた。
「今から話すことはほとんどがこの本に書かれていることだ。よく聞いてくれ。」

今から約５００年前、地球から２０億光年ほど離れたある小さな星にタナユラと呼ばれる地球から　　は確認できていなかった未確認生物が存在していた。
彼らはどこの星の者とも交流せず、タナユラ独自のやり方で国を作り、共存していった。
彼らは互いを信頼し合い、助け合って生きてきた。
そんな平穏な日々が過ぎていく中、ある日突然、異星からドーラと呼ばれる者たちが来襲、タナユ　　ラの国、星までもがボロボロになっていった。
タナユラ族は数年前まで絶滅したとされていたが、一人だけ生き残っていると言われている。
彼女の名はノウ。タナユラ族唯一の女だった。　彼女は他の者から逃げるよう言われ、タナユラ族
しか知り得ない地下室へと逃げ込んだ。ザータナは全宇宙の中で唯一、宇宙全体の星の数、位置、
存在しているものを知ることができるまでに研究が進んでいる星だった。
ノウはその研究室にこもり、ドーラ族にばれないようＳＯＳ

を発信し続けているという。

「これが現代にまで続いていて、現に我々地球人にＳＯＳが届いたというわけだ。　理解して頂けるかな？」
星の名前と言い生物と言い、すべて初耳のものばかりだ。とてもすぐには信じがたい話だ。
そして笹峰達は一体何者なのか・・・　これを聞けばある程度なら理解することができるかもしれない。
「なんとなくですけど。　てかあんたらは一体何者なんだ？」
「おっと、それを話していなかったね。　我々は極秘宇宙研究員の一人で、捜索班に所属している。青海も私同様、捜索班員だ。彼が班長で私が副班長。この船を操縦しているものが３人ほどいる。」
なるほど、これなら少し信じることができるかもしれない。現実味を帯びてきているせいなのかなんなのか・・・。
「じゃあ、そのＳＯＳってやつと俺の関係って何なんですか？」
「うん。これが一番重要だな。これもよく聞いてくれたまえ。」

真の両親は事故死する前、宇宙研究員、研究班に属していた。様々な研究を進めていく中で、ザー
タナの存在を知り、ＳＯＳについての研究も進めていた。
ザータナについては地球上で一番理解
していた人物が真の両親であった。宇宙船を造る際にもザータナにまで行けるようにするため、多　様な機能についての助言などもしていた。これはとても重要な資料な為、自分たちにもしもの事が　あった場合、それを受け継ぐ人物を特定しておかなければならなかった。そこで結城家長男である
真に託してあるという遺言が残されていた。　その頃当の本人は何も知ってはおらず、現在に至っ
ている。

「我々はそのザータナについての重要資料を見せてもらうべく、君に同行してもらうことにした。もちろん両親には前から言われており、遺言も聞いている。」
父さんと母さんが極秘研究員だったなんて・・・。　そういえば何かのファイルのような物を持たされていたな。　あれなのか？　父さんが〝肌身離さずこれを持っていなさい。いつか必要とする日が訪れるだろうから〟って言ってきたあのファイル。　あの頃は何も分かっていなかったから一回もあれを開くことはなかったな・・・。

3

俺には謎が多すぎだ。
此処に連れてこられた理由は分かったが、それなら地球のどこかで会うだけで良かったのではないだろうか。。。
それもとても気になる。
「じゃあ、どうして地球上で合わなかったんですか？　その資料が必要なら俺が宇宙まで来る必要はなかったんじゃ？」
「それが、ノウの話では最初に連絡をとれたものと協力しなければザータナを守ることができないと言う。　だがあの二人はもうこの世の者では無くなてしまった・・・。そのことをノウにも伝えた。すると彼女は『あの二人と血縁関係のある者ならほかの人物でもできる』と言ってきたんだ。」

あの二人と血縁関係をもつ者。それが俺だということか・・・？
「今君が推測した通りだ。あの二人、結城　章（ゆうき　しょう）と結城　愛（ゆうき　めぐ）と血縁関係にある人物は真くんしかいない。　妹さんも御両親と一緒に・・・そうだろ？」
あぁ、確かに妹もいたが父さんと母さんと一緒に事故に遭ったんだ・・・。
「あぁ。」
「だから君にもついてきてもらうことになった。君一人ではザータナへは行けない。そこで我々が君をザータナへ連れていく。ザータナを救うことができれば、我々の研究も大きな進歩を遂げることができるだろう。そうなれば地球のためにもなるからな。」
やはりそれが目的だったか。でも俺もザータナに行ってみたいとは思う。何より父さんと母さんが行ってきたことを無駄にはしたくない。

俺がザータナを助けることができたら二人とも喜んでくれるだろう。いつかこうなることを予想し俺にあの資料を託してくれたのだし。
「勝手に連れてこさせてしまい申し訳ないと思っている。だが君の協力が必要なんだ。改めて頼む。我々と一緒に来てくれないか？」
来てくれと言われても断るという選択肢は用意されていないし、行くしかないだろう。
「どうせ行くしかないんだ。父さんと母さんのためにも行ってやろうじゃないか。」
「ありがとう。もしこれから先真くんに何かあったらその時は必ず守る。約束する。」
「分かった。」
「話は以上だ。あとは星に着くまで自由にしていてくれ。何かあったら言ってくれればいい。」
「じゃあ、その本貸してくれないか？資料と一緒に読んでおきたいんだ。」
「あぁ、貸そう。できれば君が持っている資料を貸してほしい。もちろん君が読んだ後でだ。」

ここまで現実味を帯びた話を聞いたんだ。親とも関係しているし、貸しても問題の起きる可能性は極めて低いと考えていいだろう。
「わかった。じゃあ読み終わったら貸すよ。もう部屋に戻って良いか？」
「そうだな。じゃあゆっくりすると良い。」
そう言って本を渡された。　受け取った俺はこの部屋（これからはリビングと呼ぶことにしよう）から出て自分の部屋に戻った。

今日はとても重要な話を聞けたな。これである程度の内容は把握できるだろう。
俺は早速机に向かい本を開いた。　表紙は茶色、いかにも歴史が綴られている古い感じだ。中は横書き、

とても細かく、挿絵も書いてある。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0707j/

未明

2010年10月20日19時12分発行